

## 「東京大空襲体験記」

伊藤稔

「ガラガラガラガラー」踏切<sup>ふみきり</sup>で電車が向かってくるとき、ハッと記憶<sup>きおく</sup>が蘇<sup>よみがえ</sup>りおののいた事があった。この音が爆撃機<sup>ばくげきき</sup>「ボーイング B29」が投下<sup>おやくしやういだん</sup>した親子焼夷弾<sup>ちやくだんすんぜん</sup>の着弾<sup>ちやくだん</sup>寸前<sup>すんぜん</sup>の音なのである。これから書き留<sup>と</sup>める話は誰<sup>だれ</sup>にも信<sup>もら</sup>じて貰<sup>もら</sup>えないような東京大空襲<sup>だいくうしゅう</sup>で爆撃<sup>ばくげき</sup>を受けて、九死<sup>くじ</sup>に一生<sup>いっせい</sup>を得た私の体験記である。

当時<sup>たうじ</sup>、私は本所区<sup>ほんじょく</sup>（現在の墨田区<sup>すみだく</sup>）錦糸町<sup>きんしちやう</sup>に住み、江戸川区の新小岩<sup>しんせいわ</sup>駅まで電車通学<sup>でんしゃつうがく</sup>で関東商業学校機械科<sup>かんとうしやうぎやうきかいく</sup>の1年生、13歳<sup>さい</sup>だった。通学の服装<sup>つうがくふく</sup>は、ズボンの上にゲートル<sup>あみあ</sup>を巻き編<sup>くつ</sup>上げの靴、さらに鉄兜<sup>てつかぶと</sup>を背<sup>せ</sup>中に背負<sup>せお</sup>うといういでたちで、常時<sup>じやうじ</sup>空襲<sup>くうしゅう</sup>に備<sup>そな</sup>えていたのである。教科<sup>きやうこ</sup>も「教<sup>きやう</sup>練<sup>れん</sup>」と称<sup>しょう</sup>して軍事訓練<sup>きんしけんしゆんれん</sup>が時間割<sup>じやうかんわり</sup>に組み込まれ、先生<sup>せんせい</sup>は軍から配属<sup>はいじゆく</sup>された教官<sup>きやうかん</sup>で非常に厳<sup>げん</sup>しい教育<sup>きやういく</sup>であった。

今から70年前、昭和20年3月9日の深夜<sup>しんや</sup>に始まり翌朝<sup>あしたあさ</sup>にかけてのことである。戦況<sup>せんきやう</sup>もいよいよ敗戦<sup>ばいせん</sup>の色<sup>いろ</sup>が濃<sup>こ</sup>くなった頃、敵国<sup>ていこく</sup>の航空母艦<sup>かうくうぼかん</sup>が太平洋沖<sup>たいへいやうしゆ</sup>に停泊<sup>ていはく</sup>するようになった。艦載<sup>かんさい</sup>戦闘機<sup>せんとうき</sup>の「グラマン」や「カーチス」などが、母艦<sup>ぼかん</sup>から飛び立ち我が国の領空<sup>りやうくう</sup>に接

近すると空襲警報が発令され、同時に我が国の時速500kmを誇る「零式戦闘機」が迎撃して空中戦となった。また敵爆撃機「B29」の襲来は高度1万mの上空なので肉眼では発見が困難であるが、錦糸公園内にある軍用基地の聴音器が感知して、直ちに高射砲で迎撃した。弾が命中すると4発エンジンから煙を吐きながら真っ逆さまに墜落、搭乗兵士は落下傘で「ふわふわ」と降下してくるが、銃で武装した憲兵隊員がオートバイで着地点へ緊急出動するなど、戦場さながらの情景が日常茶飯事であった。もはや、怖いなど思ったことも無く、近所の人達とその状況を眺めているほど慣れっこになっていた。

ところが、3月9日火曜日の午後11時45分に警戒警報のサイレンが鳴った。まだ勉強中だった私は、眠りに就いていた家族全員を起こして避難に備え服装を整えた頃、空襲警報発令と同時に突然、油脂焼夷弾の親子弾に見舞われた。親子弾と言うのは、1個が上下3段に12発ずつ弾が収められ、投下後に数秒で36発に分裂して着弾するため、地上では広範囲に大火災となる驚異的な弾である。それが着弾と同時に家の中へ向かって、「ドーン」と炸裂して1mぐらいの火炎を噴出した。咄嗟にその焼夷弾を夢中で取り上げて道

路上へ<sup>ほう</sup>抛り投げたが、<sup>こうはんい</sup>広範囲に多数<sup>ちやくだん</sup>着弾したため、付近の家屋全体に火が付いて大火災となった。「もうだめだ」と思った。

父は、<sup>さとう</sup>砂糖類の<sup>おろししょう</sup>卸商を営んでいたが、<sup>けいかい</sup>地域の消防団員として警戒警報発令と同時に消防署へ出動していた。私たちは、母が<sup>ようじ</sup>幼児を背負い兄弟3人とともに、なぜかバケツと<sup>ふとん</sup>布団を1枚ずつひきずって燃え盛った家から<sup>ひなん</sup>避難を始めた。<sup>じゅうたんぱくげき</sup>絨毯爆撃の始まりである。

近くの<sup>きんし</sup>錦糸公園は木に登ると野球場内が見えたが、中に<sup>どのう</sup>土嚢を張り巡らして<sup>めぐ</sup>探照灯1基、<sup>たんしょうとう</sup>聴音器1基、<sup>ちょうおんき</sup>高射砲2門を備えた<sup>こうしゃほう</sup>軍用基地になっているため、公園の周囲約100メートルほどが<sup>そかい</sup>強制疎開で、家屋が<sup>とりこわ</sup>取壊されて空き地になっていた。その<sup>ほうくうごう</sup>共用防空壕に<sup>もぐ</sup>潜り込んだが近所の<sup>ひなんみん</sup>避難民が数十人もひしめき合って、何やら<sup>きょう</sup>お経をあげ手を合わせて<sup>ふんいき</sup>異様な雰囲気であった。間もなく警防団員が来て大声で「そんなところに入って居ちゃ焼け死んじやうぞ、早く<sup>に</sup>逃げろ」と<sup>どな</sup>怒鳴ったのですぐ飛び出したが、公園には軍の基地があるので、なお危険だと思い、<sup>どだいいし</sup>空き地に<sup>かけ</sup>積み重ねた解体家屋の土台石の陰に家族5人が身をひそめた。そこには消防車<sup>しょうかせん</sup>がいて気強く思ったが、間もなく<sup>しょうかせん</sup>消火栓の水圧が落ちて水が出なくなり、消防士が「水が無い、もう<sup>だめ</sup>駄目だ逃げよう」と言って消防車に乗り込み行ってしまい心細

くなくなった。すでに、あたり一面は火の海であった。その頃、わが軍が無抵抗となっている空の煙の隙間から、爆撃機「B29」が500mぐらいの低空飛行で巨大な姿を見せていた。身边には熱風が台風のように強く吹きまくって火の粉が舞い上がり、布団が燃えながら転がるように飛んで行き、さらに、建物からは焼けた赤紫色のトタンが飛ぶなど、想像を絶する現象が目前で起きていた。煙火でむせて呼吸が苦しくなり消火栓からチョロチョロと出る水をバケツに受けて、袖を濡らしながら鼻に当ててしのぎ、衣服の内側まで入り込む火の粉を払い除けていた。そのとき強風のなかを近所のタバコ屋のお婆さんが、煙に巻かれながら這うようにして逃げ延びてきた。そこで息が絶えたのか倒れ込んで間もなく裾から火が燃え上がった。私からは僅か2mぐらいしか離れていない所であるが、自分も息苦しさと家族の火の粉を払うことで精いっぱい、助けることもできずにいるしかなかった。

夜が明けてから、やがて熱風が収まり涼風に変わったので、辺りを見渡すと建物はほとんど焼失して残骸すら無く一面灰と化し、至るところで逃げ切れずに焼死や窒息死した遺体が折り重なり異臭を放っていた。その時まで、死ぬか、助かるか、などと考える余裕

も無かったが、「あァ、やっと助かったんだ。」という実感が湧いてきた。

父とは、錦糸公園内の決めていた場所で再会を果たすことができたが、もう此処には戻るところは無い。しばし茫然としていたが両親の田舎へ行こうということになった。

交通機関は、全線不通で歩く方法しか無い。8時頃と思うが、とにかく田舎へ向かって歩き出したが、街の曲がり角ごとに数人が黒焦げの様相で折り重なっており、川の中は多数の水死者で悲惨を極めていた。北千住の大橋端まで来たとき婦人会の方の炊き出しおにぎりを頂き、あとは黙々として歩いたが着の身着のまま、体ひとつで食べるものも無く夜になって疲れ果て、21時頃越谷で警察署の宿直室に泊めて貰うことができた。そして電車が開通した12日に栃木へたどりついた。

この大空襲では、約10万人の犠牲者が出たと報じられた。私も生まれ育ったふるさとや、幼馴染みの多くを失ってしまった。目前で近所のお婆さんを助けることもできなかった。これらの事実は大きな印象として残っており絶対に生涯忘れることのできない記憶である。戦争は天災ではなく人災である。この貴重な体験は、永久

に語り継<sup>つ</sup>がなければならないと思っている。